

インフラの呪縛からの解放

——寄せ場の労働を再解釈する

原口 剛

- 1 「コミュニズムはどこにでもある」
- 2 想像力の自由とインフラの現実——グレーバーとハーヴェイ
- 3 寄せ場の労働を再解釈する
- 4 遮断・サボタージュ・コモン化
おわりに

1 「コミュニズムはどこにでもある」

そこから私が言いたいのは次のことです。もしわれわれがモースにちなんで、共産主義を全体的機構としてみないならば、共産主義〔コミュニズム〕はどこにでもある。エクソンやシティバンクといった巨大会社の内部でさえ、人びとはほとんどの時間、共産主義的に労働しているのです。共通の任務を前にした時、人は仲間に「そのスパナを取ってくれ」と頼まれた際、「代わりに何をしてくれる？」とは言わないものでしょう。みなそれぞれの能力に応じて他人の必要に応じているのです。(グレーバー 2009 : 53)

デヴィッド・グレーバーが提起した議論のなかでも、コミュニズムはどこにでもあることを論じたこの言葉は、もっとも重要な主張のひとつだろう。コミュニズムとは、未来のどこかの時点で存在が証明されるべき全体社会なのではなく、いまこの瞬間にも証明されつづけている物事である。そのことをかれは、スパナのやりとりを例にとって論じる。ハイ・セオリーに属する高踏な問いへの答えを、ありふれた日常の身振りのなかに見出すこの言葉には、グレーバーの精神の真髓が詰め込まれているように思われてならない。そこには、国家が存在しなくとも、人間とはたがいに秩序を生み出し、社会をつくりだす生き物であることへの確信が、響き渡っている。

このような、だれもが日々行なっているにもかかわらず、だれも見落としていること——グレーバーのいう「想像力の死角」の領域——への関心は、かれの著作に数多くみられる。こうした鋭い観察眼、そして人間への好奇と限りない信頼は、グレーバーの思想の最大の魅力であろう。さらに圧倒されるのは、ささいな物事のうちに見出した発見を裏づけるにあたり、かれが参照する歴史と空間の奥行である。グレーバーは、5000年もの人類史を参照しつつ、その作業を行なっていく。かれにとっては、古代ギリシアの時代ですら「近年のこと」である。まして資本主義が支配す

る近代など、つい最近のことではない。

数千年の人類史をひも解くグレーバーの議論は、もちろん学術的な論証の手続きに則るものだが、その視野を開いているのはかれの好奇心であり、想像力である。まるでその目でみてきたかのように、5000年前の人間の社交を論じる語り口に接するたび、私はかれの想像力に驚かされるのだ。だからこそ、グレーバーにとっての「自由」とは、なにより想像の領域の自由に賭けられている。そのことは、かれが政治的対抗力の源泉について論じるとき、もっとも明らかだろう。

革命を作り出す多くのイデオロギー作用は、魔法使いや魔女たちの亡霊的な闇世界で駆動される。実際それは異なった形式の「魔術的力」の道徳的含意を再定義することによってなされる。しかしこのことは、これらの亡霊的な領域が、常に道徳的な想像力の支点であること、つまり可能な革命的変遷への創造力の貯水池であることを強調しているにすぎない。まさにこの見えない——とりわけ権力にとって見えない——空間からのみ、反乱の可能性、つまり革命時においてのみ、どこからともなく現れる信じがたい社会的想像力が到来するのだ。(グレーバー 2006 : 79-80)

対抗の力とは、想像力に根ざしていること。そのことを再確認したうえで、本稿では、あえて想像力とは対極的な議論を挿入してみたい。すなわち、インフラストラクチャー（以下、インフラ）をめぐる議論である。近年の都市論や空間論のなかで、インフラはますます重要なキーワードとして浮上しつつある。なにより、原発のメルトダウンから国立競技場の建設にいたるまで、私たちがいま直面している重大な問題でもある。ところで、インフラをめぐる議論の礎を築き、いまなお世界的な議論を導いている代表的人物として、デヴィッド・ハーヴェイが挙げられよう。そのハーヴェイとの批判的応答のなかで、グレーバーは、インフラの議論へと足を踏み入れ、おそらくは想像力についてのかれの議論を、もっと先へと進めようとしていた。だが、かれのあまりに早い死によって、その議論は本格的な展開をみないまま、私たちの前に残されている。

このような状況を踏まえ、本稿では、2つの課題に取り組みたい。第一に、グレーバーが想像力とインフラの関係について提示したいくつかの論点を確認しつつ、そこから開かれるであろう議論の可能性を探りたい。そのうえで、第二に、筆者が研究活動のフィールドとしてきた寄せ場・釜ヶ崎へと目を向け、過去に積み重ねられてきた労働や抵抗の実践を再解釈することを試みる。このように足元のフィールドに照らし合わせることで、グレーバーが開いた議論の可能性を、具体的に示してみたいのである。そのような作業により、かれが開こうとした可能性を受け継いでいくための道筋を、見出していきたいと思う。

2 想像力の自由とインフラの現実——グレーバーとハーヴェイ

(1) ハーヴェイのアナキズム批判

マルクス主義者であり地理学者でもあるデヴィッド・ハーヴェイは、オキュパイ運動の熱意ある支持者であると同時に、グレーバーたちが主導した「新しいアナキズム」に対する手厳しい批判者でもあった。その批判は、オキュパイ運動を含むグローバルな蜂起に刺激されて執筆した『反乱す

る都市』をはじめ、2000年代以降のかれの著作で繰り返し表明されてきた。もっとも直截的な批判のひとつとして、ハーヴェイが2012年5月にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで行なった講演「反乱する都市——階級闘争の都市化（Rebel Cities: The Urbanization of Class Struggle）」が挙げられよう。この講演は、YouTube上にアップされている⁽¹⁾ほか、リブコム（libcom.org）のウェブサイト上には簡潔かつ批判的な要約が掲載されている⁽²⁾。この講演のなかでハーヴェイは、かれが水平主義と呼び、グレーバーが非中心的組織化と呼ぶ議論への批判を提示するのだが、私たちにとって重要なことに、かれは福島第一原発のメルトダウンという惨事を取り上げながら議論を展開している。

あなたが太平洋上を飛行しているとして、太平洋航路の半ばになって誰かがこういったとしよう。「さて、たったいまニューヨークの航空管制はアッセンブリのモードに入りました。かれらはどの機体から着陸させるかを議論するつもりです」。そんなことを耳にしたら、どんな考えが頭をよぎるでしょうか！現代生活には、いまや「緊密に結合されたシステム」と呼びうるものなかで組織化されている側面が多々あるのであって、それらは指令とコントロールの構造を必要としています。私は、赤や黄色のランプが点滅するとかの〔危機の〕事態の只中で、アナキストの友人に原子力発電所の任に当たってほしいとは思わないでしょう。

ハーヴェイが言わんとしているのは、こういうことだ。『反乱する都市』のなかで詳述されるように、アナキズムの伝統は、国家権力のみならず、国家に似たあらゆる階梯的な組織化を退け、「水平性」や「非階層性」を追求してきた。「しかし、これらの原則は、小グループにおいては機能するが、大都市レベルの規模で機能させることは不可能だし、ましてや、現在地球という惑星に住んでいる70億もの住民にとって機能させるのは不可能である」（ハーヴェイ2013:207）。つまりハーヴェイに言わせれば、アナキズムはたしかに資本主義への対抗可能性を切り開いているが、資本主義が機能する地理的空間の構成を——ここではスケールの問題を——無視している。もしオルタナティブを示したいと望むならば、資本主義に十分に対抗しうる広さを有する抵抗空間を構築する戦略や、その空間を管理運営する具体的な方途を見出さなければならない。そのためには、階梯的な組織化を考案することは避けられず、よって反資本主義闘争は水平性を乗り越えて進まなければならない——このような主張が、上掲の講演では「航空管制と原子力システムをいかに管理運営するのか」という問題へと移し替えられ、インフラの問題として再提起されているのである。

急ぎ述べておかねばならないが、このハーヴェイの議論は、あまりに拙速である。かれの議論のなかでは、原発を廃絶し解体する道筋が、はじめから除外されている。またハーヴェイの批判は、資本主義後の世界を想像する思考実験でもあるわけだが、その世界では資本主義世界が創出したイ

(1) Harvey, David. Lecture. Rebel Cities: The Urbanization of Class Struggle. LSE. 10 May 2012 (<https://www.youtube.com/watch?v=KM9IYtgZ8Sg>).

(2) Frederick Schulze, "I wouldn't want my anarchist friends to be in charge of a nuclear power station": David Harvey, anarchism, and tightly-coupled systems, Libcom.org, Jan 22 2013 (https://libcom.org/library/i-wouldnt-want-my-anarchist-friends-be-charge-nuclear-power-station-david-harvey-anarchi#footnote1_ds68yl7).

ンフラを（再）利用できるし、利用すべきと想定しているように思われる。しかし地上を覆うインフラのすべてを活用しなければならない道理が、どこにあるのだろうか。そのことは、後述するように、ハーヴェイ自身が確立した理論に照らし合わせても不可解なのだ。

とはいえハーヴェイの主張には、かれの意図とは異なる意味で、無視しえない問いが含まれている。資本主義が過去になった時代が実現されたとしても、廃炉にされるべき原発の残骸や、汚染された土地は、遺されるであろう。その事実を、原発のメルトダウンという惨事を経た時代のなかでは、認めないわけにはいかない。こうして自由であるはずの対抗的想像力には、インフラの現実という負荷が課せられる。航空管制や原子力システムを持ち出しつつアナキストに対して「現実的であれ」と諭すハーヴェイの言葉は、インフラが想像力に課すこのような負荷を——なんら批判的な洞察を加えることなく——代弁しているのだ。

（2） グレーバーはインフラをどう論じたか

しかしグレーバーは、かようなインフラをめぐる問題をはっきり認識し、おそらくはハーヴェイ以上に真剣に考えていた。グレーバーの著作のなかでも、この問題がもっとも深く論じられているのは、『官僚制のユートピア』である。これを論じるうえでグレーバーは、2002年はじめから2003年終わりにかけて、自身がかかわったニューヨーク直接行動ネットワーク（New York Direct Action Network：DAN）でのエピソードを取り上げる。直接民主主義を原則とする脱中心的なネットワークであるDANに、あるとき自動車が寄贈された。この自動車によって、DANは思いもよらぬ危機を招き入れることになったのだという。たとえば、法律上は組織として自動車を所有することはできず、だれかが所有者として名乗りを上げなければならない。その人物の肩には、未納の罰金や保険料の支払いなど、諸々の責任や雑事が降りかかってしまう。結果としてDANの定例会議は、所有者当人が抱え込んだ法的問題への対処に多大な時間を費やす羽目になってしまった（グレーバー 2017：119-120）。

この経験を検証したうえで、グレーバーは次のような知見を見出す。ラディカルなプロジェクトは「大規模で重量級の物品、すなわち、建築物、自動車、トラクター、ボート、産業機械などの世界に、足を踏み入れるや座礁してしまう」傾向があり、その規制の効果は「政府による実力〔フォース〕の独占的使用ではなく、物品それ自体の巨大さ、堅牢さ、重量から、湧き出てくるようにみえてしまう」（グレーバー 2017：121-122）。ここでグレーバーが見て取ったのは、モノでしかないはずのインフラが、その所有者や使用者に対して無視し得ないほど絶大な力を及ぼす、ということだ。だがもちろん、その力が、モノ自体がもつ巨大さとか重量とかの物理的性質から生じるのではない。グレーバーは、「不動産（real property / real estate）」という言葉の由来にさかのぼることで、こうした力の源を探り当てている。

たとえば、ある建築物が、「現実の〔財産〕（real property）」とか「現実の地所〔不動産〕（real estate）」と呼ばれるのはなぜだろうか？この用法における「現実の（real）」は、ラテン語のレス *res* すなわち「モノ（thing）」に由来するのではない。「ロイヤル」とか「王に属する」といった意味をもつスペイン語のレアール *real* から由来しているのである。ある主権の領土内にあるすべての土地は、

究極的には主権者に帰属している——法的にはこれはいまでも変わらない。国家がそれに規制を課す権利を有する理由はこれである。しかし、主権とは、究極的には、婉曲に「実力〔フォース〕」と呼ばれるもの、つまり暴力の独占に帰着する。（中略）財産が「現実的〔リアル〕」であるということは、国家がそれを接収するか破壊するかが可能であるということなのである。（グレーバー 2017：122-123）

建築物なり土地区画なりを所有すること、ただそれだけで、所有者や使用者は国家の暴力のうちに絡めとられてしまう。このようにしてインフラは、警察がふるう警棒と同じように、人びとを官僚制の構造的暴力へと従わせる力を発揮する。けれどもその力が作動する様態は、警察とは異なる。ここでは、構造的暴力があらゆる場に浸透して自明の環境と化し、まるでそこに暴力がないかのように見せかけるからだ。その力は、「わたしたちをかこむ大規模で重量級の物品——建築物、乗り物、コンクリート構造など——の量塊と堅牢さそのもののうちに官僚制による諸規制が消失してしまったかのようにみせかけながら、官僚制の原理によって規制された世界を自明で不可避のものに、そうではない世界を夢想的幻想に仕立て上げる」のである。

だからこそ DAN は、「だれもがハンマーをもって、自動車に一撃を加えられる」パーティを催したのである。それはただの憂さ晴らしではなく（痛快さの感覚は重要だろうが）、官僚制の現実効果を無力化させ、可能性の地平を広げるための、積極的な直接行動である。この点は、蜂起の意味を考えるうえできわめて重要であるように思われる。蜂起の局面において、民衆はなぜ、警察だけでなく、自動車なり窓ガラスなりを自身の敵とみなし、攻撃するのか。その奥深い理由を、この考察は示しているからだ。

（3）ブルシット・ジョブからパットシット・コンストラクションへ

おそらくグレーバーは、インフラへのいっそう深い問いへと分け入ろうとしていた。2019年12月、レネゲイド（Renegade）主催のインタビューに応える議論のなかで、グレーバーは、これまで金融資本に対して繰り返してきた分析の力を、不動産資本や建設業へと向け、資本主義的都市化の問題を正面から取り上げている。興味深いことにグレーバーは、「都市への権利」に言及しつつ、論敵ともいえるハーヴェイの議論をも、自身の分析へと積極的に組み込んでいる。

ここであらためて、ハーヴェイの議論の論点を整理しておきたい。ハーヴェイが初期の研究のなかで、資本による「空間の生産」の論理を抽出し、都市を構成するインフラを建造環境（built environment）と定義した。建造環境の生産は、資本主義が拡大再生産するうえで必要不可欠なだけではない。資本主義はその論理の果てに過剰蓄積の危機に行き着かざるを得ないが、その危機を回避するための抜け道がある。すなわち、「資本の第二循環 the secondary circuit of capital」へと蓄積を切り替えることによって、過剰に蓄積された資本を建造環境へと吸収させ、延命をはかる。このような資本蓄積の論理を、ハーヴェイは spatial fix と呼ぶ。fix とは、「事物を固定させる」という意味のほかに、「麻薬を打つ」という意味がある。この二重の意味が示すように、資本による建造環境の創出は、過剰蓄積の危機を将来へと先送りさせ、資本蓄積の新たなラウンドを生み出すために必要不可欠な回路としてある。

このような議論から導き出される重大な知見は、第一に、かような資本主義の論理は、いわゆる「消費者のニーズ」とは関係なしに、まして民衆の必要などおかまいなしに、建造環境をつくりだす、ということだろう。それら「ニーズ」や必要が問題になるのは、すでに建造されてしまったインフラの経済的生命を絶やさぬために、という資本の必要の範囲内でのことでしかない。第二に、不動産業が独立した部門であるからには、建造環境の生産は暴走しかねず、総体としての資本にかみ合わないようなインフラを生み出しうる。要するにこのような論理のもとでは、建造環境の生産それ自体が自己目的化する傾向が生まれるのであり、その帰結として、民衆にとって不必要であるどころか、資本の拡大再生産にとっても邪魔でしかないような、無意味なインフラが建設されうる。

だから、地上を覆うインフラのすべてが必要とは限らないことは、当のハーヴェイの議論から導き出される結論なのだ。付け加えるならば、ハーヴェイが自身の空間論を完成させた著作『資本の限界 (*The Limits to Capital*)』(邦題は『空間編成の経済理論』)の結びで最後に強調したのは、軍事の問題であった。すなわち「兵器は、資本と労働の過剰から支払いがなされて購入されなければならないというだけでなく、同時に、使われなければならないのである。(中略)この見解がはらんでいる意味には恐ろしいものがある。資本主義は去ってなにかもう少し正気な生産様式に籍をゆずる時がきている、と宣言するにさいして、これ以上によい理由があるだろうか」(ハーヴェイ 1989-1990: 619)。このようにハーヴェイにとっても、有害でしかないインフラの存在は、問題意識の中核にあったはずである。

グレーバーは、こうしたハーヴェイの議論を踏まえ、それを政治的に読みかえながら、「とち狂った建設 (bat shit construction)」をめぐる独自の議論を切り開いていく。グレーバーの認識によれば、ヒラリー・クリントンが金融界を代表する存在だとすれば、ドナルド・トランプが代表するのは建設業界である。ここでグレーバーが注意を促すのは、建設業と採掘業とは、現在の経済成長を駆動させている活力ある経済部門であること、そして両産業が、現代世界において活力あるプロレタリアートがかるうじて存在する最後の産業部門だということである。さらに建設業とは、労働ボスやヤクザが跋扈する経済世界であり、右翼的なものの温床でもある。グレーバーによれば、トランプ現象とは、そうした性質をもつ建設業が資本主義の中核的な力へと昇りつめたことの現われである。こうした建設業の暴走は、右翼ポピュリズムの増長を伴い、しかも、それは合衆国だけに限られたことではない。

明らかに、これこそ世界じゅうで起きていることなのです。だれもがそれを行なおうとしています。[インドの]ムディやトルコのエルドアン、イランのアフマディーネジャードをみればお分かりでしょう。かれらは、それらとち狂った (bat shit) 狂気の建設プロジェクトを完成させるべく金融緩和の乱発によって大金を注ぎ込んでいます。そしてそのようなことに手を出すのは、ほとんど決まって右翼ポピュリストなのです。たいていの場合それがもたらすのは——とりわけ政治的意図がそこに絡んで

くるため——、現実にはだれも欲していないような、まったく馬鹿げたインフラなのです。⁽³⁾

こうして、「クソどうでもいい仕事」が生み出されるのと同じように、「とち狂った」狂気の建築が地表を覆い尽くしていく。しかも、それが与える帰結は、いっそう深刻であると言わなければならない。土地や資源を大量に食い尽くす大規模建設プロジェクトは、民衆の生や労働者の命を犠牲にするうえ、地球そのものに取り返しのつかないダメージを与えるのだから。

3 寄せ場の労働を再解釈する

このようにグレーバーは、インフラを、民衆に敵対的なものとして明確に捉えた。『官僚制のユートピア』でかれは、それが想像力を現実へと従わせ、対抗力を萎えさせていくような効果をもつことに、注意を促した。さらにグレーバーは、右翼勢力の権力の温床である不動産部門および建設部門が暴走し、狂気の建設プロジェクトが地球を覆い尽くそうとしている状況へと分け入ろうとしていた。そこから先にかれがどのような議論を展開しようとしていたのかは、いまとなつては、推察するしかない。だが少なくとも、グレーバーが向き合おうとした課題が、私たちが目の前の状況に切り込むうえで決定的な重要性をもつことは、明らかである。

たとえば狂気の建築を論じるかれのインタビューは、支配者層がオリンピックや万博などのメガイベントに取り憑かれる様を考えるうえで、重要な手がかりである。2020（21）年東京オリンピックで私たちが知らされたのは、失敗に終わることが確実だったにもかかわらず、それでも強行しようとする支配者層の意思の堅さであった。もうひとつ明らかだったのは、オリンピックに利害をもつ支配者たちが、スポーツにはなんの愛着ももってはいない、ということだ。むしろかれらの関心は、オリンピック開催を名目として、すでに建設されてしまった巨大なインフラにあったと考えるべきだろう。ハーヴェイが兵器について述べたように、これらのインフラは、「資本と労働の過剰から支払いがなされて購入されなければならないというだけでなく、同時に、使われなければならない」のだ。しかも無残な失敗を世界に見せつけたオリンピックは、それでもなお、ペキンで、パリで、ミラノで、ロサンゼルスで、生きながらえようとしている。開催されるそのたびごとに、ホストの都市は、狂気の建設が競い合う舞台と化すだろう。

とするならば、こうした狂気の暴走を食い止め、無用なインフラや有害なインフラを解体することは、対抗的想像力にとって最優先課題のひとつであるはずだ。この課題にたち振り返るとき、過去にたたかわれてきた運動や闘争のなかに、対抗的な実践や戦術を新たに見出すことができないだろうか。以下で私は、この課題を自分自身の足元に引きつけて捉え返してみたい。私が長く携わってきたのは、「寄せ場」と呼ばれる土地の歴史であり、なかでも大阪・釜ヶ崎の闘争史である。その場所は、インフラと深いかわりをもつ。寄せ場・釜ヶ崎は、1970年大阪万博をはじめ、一連の都市開発プロジェクトに必要な不可欠な労働力を確保するために、日本政府の手により安価な労働

(3) David Graeber 'Batsh-t Construction', Renegade Inc., 7 December 2019 (<https://renegadeinc.com/batsht-construction/>).

力の供給地へと変貌させられた経緯をもつ。すなわちこの街は、土建国家を構成する下層部として生み出され、そこには全国各地の周縁的な労働者が寄せ集められたのだった（原口 2016）。

寄せ場・釜ヶ崎へと埋め込まれた労働力供給の実態を見れば、建設業とは右翼勢力の権力の温床であるというグレーバーの論点を、はっきりと確認することができる。この労働市場において労働力を買入れるのは、重層的下請けの最末端の業者や手配師であった。かれらは、ただ労働力を仲介・派遣するだけでなく、労働者を統制する役割をも担っていた。そして、そのうちの少なからぬ部分を、ヤクザが占めていたのである。したがって釜ヶ崎においてヤクザとは、国家を補完する役割を与えられた代理人であった。だからこそ、1970年代以降に立ち上がった労働者の抵抗運動は、かれらを潰そうとするヤクザとの対決に直面せざるを得なかったのである。また、労働者を統制するもうひとつの暴力は、警察権力であった。警察権力は、労働者の蜂起の瞬間には前面にたって鎮圧し、また、ヤクザが運動に打ち負ける局面では労働者や活動家を弾圧する役割を担った。そのため釜ヶ崎において警察は、「国営暴力団」と呼ばれたのだった。

このようにインフラの暴力が張り巡らされた街のなかで、しかし労働者たちは幾度となく蜂起し、闘争を積み重ねてきた。その闘争史を捉え返すことは、現在であればこそ、意義のある作業となろう。これを成すにあたって重要なのは、現在の視点からその労働と闘争を再解釈することである。たとえば、次のようなことを考える必要がある。建設産業の最下層部に組み込まれた労働者は、「労務者」と呼ばれ、差別される存在だった。そうした差別が、かれらに過酷でありながら低賃金の労働を強いることを可能にしていたのである。だが、かれらは、みずから置かれた〈ミジメ〉な状況を〈ホコリ〉の心性へと転化することで、きわめて力強い抵抗を繰り広げた（青木 1989）。このなかで労働は、否定から肯定への転換を可能にする基軸であった。以下のような語りがある。労働者が抵抗主体として立ち上がるための基盤だったのである。「労働者、建設者は、われわれである。万博を見よ。有名高層ビルを想え。新幹線を走らせた。高速道路はどうだ。何一つ、吾々の手で成っていないものは、無い」（労務者渡世編集委員会 1975：340）。

ここで私たちは、立ち止まって考えなければならないのだ。もしインフラが社会を可能にするものであるより、自由を躓かせるもの、想像力や生を拘束するものだとするならば、上記の語りはなにを意味することになるだろうか。高層ビルや新幹線や高速道路の建設者としての誇りが明かすのは、インフラへの対抗というよりむしろ、労働者の主体性がインフラの権力へと動員された事実であろう。インフラという視点にたつとき、私たちは後者の側面を重視しないわけにはいかないのであり、したがって伝統的なスローガンを再検証することなしには、寄せ場の対抗を論じることはできない。

この課題を前にするとき、グレーバーが論じるケアリングの議論が、重要な手がかりを与えてくれる。「すべての労働はケアリング労働だとみなすこともできる」と述べつつ、グレーバーは、地下鉄労働者を例にとりて次のように論じた。

地下鉄労働者が実際におこなっていることは、フェミニストが「ケアリング労働」と呼ぶものになり近いものである。それはレンガ職人よりも看護師の仕事のほうに共通点を多くもっているのだ。女性の不払いケアリング労働が「経済」についての説明から抜け落ちているのと同じように、労働者

階級の仕事におけるケアリングの側面はみえなくなっている。（グレーバー 2020：307）

労働者階級が携わるすべての仕事には、ケアリングの側面がある。はたしてこれは、寄せ場の建設労働者についても該当するだろうか。渡辺拓也はその参与観察研究のなかで、寄せ場や飯場での労働経験を次のように描き出している。

屋根の板を打ち付けたり、ベニア板を2階にあげたりというように、1人ではできないことがある。そういう時に必要なのもう1つの身体なのだ。機械や道具より少し融通の利く人間の身体。誰かいないとできないことをするために、素人でもいいから手元を雇う。また、掃除をしていて思った。しょっちゅう掃除をさせられた。これは2人でしなければできない作業がその段階ではないからで、遊ばせておくよりは何かやらせておこうということ。手元とはそういう存在なのだ。（渡辺 2017：246-247）

ここで渡辺が携わっているのは、建設現場の労働である。この仕事を終えたあと、かれの胸には「僕にもこの街が作れるのだなあ。実際作っちゃったよ！」という感慨が沸き上がったのだという（渡辺 2017：56-57）。なるほど、「この街」をつくったのは自分自身の労働だという感覚は、それが巨大な造形であるだけに、力強いものだろう。だが、じっさいにかれが行なったのは、屋根の板を打ち付けること、ベニア板をあげること、そして、掃除すること、である。すなわち、そのほとんどは、グレーバーが言う意味でのケアリング労働と解釈しうるものなのである。仕事終わりの感慨とは裏腹に、渡辺の観察眼は、このようなマイクロなやりとりにこそ向けられ、その報告は多種多様なコミュニズムに満ちている。その記述は、寄せ場労働者の主体性にまつわる伝統的な語り口が取りこぼしていた側面——まさに想像力の視角——へと、目を開かせてくれる。地下鉄労働者がそうであるように、寄せ場の建設労働者もまた、ケアリング労働を行なってきたのだ。

さらに、従来の寄せ場の運動や研究は、多くの場合、寄せ場労働者とは建設労働者であることを自明視してきた。たしかに1980年代以降だけみるならば、釜ヶ崎の労働市場のほとんどを建設業関係の労働が占めた。だが、70年代以前の時期には、建設業のほかに、港湾運送業も同程度の比重を占めていたのである。あるいは、労働市場の陰にかくれて、あまりに見落とされがちな労働が存在している。寄せ場の労働者が失業した際、多くの労働者が野宿生活へと放り出されてきた。青木（1989）が明らかにしたように、その生活は、寄せ場の労働世界でもっとも劣位に価値づけられている。だが、そこにも労働があるのだ。つまり野宿生活者の多くは、アルミ缶や古紙や段ボールを収集する労働に携わっている。かつて隅谷三喜男はそれらを「都市雑業」と定義したが、現代的文脈を踏まえるならば、むしろ「都市リサイクル業」と呼ぶほうが適切だろう。そのように呼ぶときすぐ気づくのは、港湾運送業や都市リサイクル業は、ともに流通にかかわる労働だということだ。建設業のような目に見えて生産にかかわる労働が全面化することで、これらの労働の意義はかすんでしまったのだろう。

このように、ケアリングという視点から捉え返すことの最大の効用は、寄せ場に限るだけでも、労働を多数化することができる、ということである。肝心なのは、それぞれの労働に優劣や上下の

関係を差し挟むことなく、相異なる性質とフィールドをもつ複数の労働として捉えることである。そうすることによって、私たちは、それぞれの労働のフィールドのなかで展開されてきた、複数の抵抗へと目を開くことができるだろう。最後に、港湾運送業、建設業、野宿労働という3つの労働を取り上げ、それぞれの抵抗のありようを提示してみたい。これらはいずれも、寄せ場・釜ヶ崎において大多数の労働者が携わってきた労働である。

4 遮断・サボタージュ・コモニ化

(1) チョークポイントを遮断する——港湾労働

「チョークポイント」という言葉がある。海上の物資の輸送ルートには、そこを通過しないことには先に進むことができず、したがって複数の船舶が殺到するような要衝が存在する。チョークポイントとは、そのような要衝を指し示す言葉で、chokeとは「詰まる」「狭まる」などの意味をもつ。2021年には、スエズ運河において大型コンテナ船が座礁し、運河の航行が閉ざされる事態が、世界的な流通の危機として注目を浴びた。このことが示したように、まさにスエズ運河とは、その航行可能性が世界規模の流通のフローを左右する重要性をもつのであり、代表的なチョークポイントなのだ。この言葉は、港湾運送業のフィールドでのインフラの闘争にとって、中心的なものとしてある。

1970年代の初頭まで、釜ヶ崎の労働市場において、港湾運送業は建設業と並ぶ比重を占めていた。釜ヶ崎の日雇い労働者は、大阪港はもちろん、神戸港を含む阪神間の港湾にとって、欠かせない労働力として活用されたのだった。重要なことは、その当時の港湾において、海から陸へ、陸から海への貨物の運搬は、人力に頼るしかなかったことである。具体的には、まず、貨物を積んだ船舶は入港したのち、沖合の海上で停泊しなければならなかった。というのも、建造技術の発展により大型化した船舶は、それに見合った深さをもたない港湾に接岸することはできなかったからである。こうして船舶（本船）と陸上とのあいだに空隙が生まれるのだが、この空隙を埋めるのは、本船と陸上とを往復する舢舨であった。すなわち、本船に積まれた貨物は舢舨に移し替えられ、その後は舢舨が貨物を岸壁へと運び、ようやく陸揚げされるのだった。すると貨物を運ぶ労働には、本船と舢舨とのあいだを結ぶ労働と、舢舨と岸壁とのあいだの労働とに分かれる。前者に携わる労働者は「沖仲仕」と呼ばれ、後者は「陸仲仕」と呼ばれていた。釜ヶ崎からの労働者が携わっていたのは、主として「沖仲仕」である。

港湾運送業において労働者は、採掘業や建設業と同じように、「労働ボス」の支配下に置かれていた。その暴力的支配のもと、とりわけ日雇い労働者は過酷な労働を強いられ、命を奪われる事件もたびたび起こった。そうした従属的な立場にありながら、しかし、労働者はある一点において、決定的な優位をもっていた。本船と岸壁のあいだに空隙が存在し、また貨物が労働者の身体を動員して運ばれる以上、かれら労働者が手を休めれば、とたんに貨物の流通は遮断されるのだ。よって、港湾労働者が60年代に繰り広げたストライキは、絶大な影響を与えることができたのだった。

だが、このような労働者の優位性は、60年代末以降に掘り崩され、立場は逆転された。そうした港湾における資本の圧倒的有利は、労働を機械化することによって、実現されたものであった。

多種多様な形状や重量をもつ貨物を規格化されたコンテナに収容し、それらをガントリークレーンの操作によって揚げ降ろしすることで、必要とされる労働力を劇的に削減させたのだ。なにより、そのような労働の機械化は、新たなインフラの構築を伴うものであった。港湾には新たに巨大なコンテナ専用ターミナルが造成され、そこには巨大なガントリークレーンが設置されたのである。神戸港におけるポートアイランドや、大阪港における夢洲・咲洲は、そのような目的のもと造成された土地である。

以上のように、流通の遮断とは、労働者が対抗力を実現するための、中心的な実践であった。だが、やがて船と陸との空隙は塞がれてしまった。資本の側は、新たなインフラを構築することで、自身の泣き所であるチョークポイントを克服し、労働者に対する圧倒的優位を打ち立てたのである。また同時に、こうした流通における技術革新は、土建国家の論理と結びつくことで、開発主義のフロンティアともなった。造成された人工島では、コンテナ専用ターミナルの建設だけでなく、海上にニュータウンをつくりだすことが企図された。こうして膨大な面積の海面が失われたのだが、その建設工事には、やはり釜ヶ崎の日雇い労働者が動員されたのだった。

（2） サボタージュと暴動——建設労働

こうしたコンテナ化による労働力削減により、70年代初頭には多数の日雇い労働者が不要化されたわけだが、釜ヶ崎では港湾での失業が大きな問題となることはなかった、というのも、もうひとつの主要な就労先である建設業へと移行することができたからである。70年代半ばの不況期から80年代にかけて、釜ヶ崎の労働者の就労先のほとんどの割合は、建設業が占めるようになった。しかも80年代には、大規模な都市開発プロジェクトが繰り広げられるなか、釜ヶ崎での求人数は増加の一途を辿り、過去最高の記録を塗り替えてつづけたのである。こうした事情を背景として、「都市建設者としての労働者」という語りの訴求力は、いっそう力強くなったものと推察される。以下では、そうしたアイデンティティの縛りゆえに見えにくくなっていた実践や戦術のひとつひとつに、光を当ててみたい。

a：サボタージュ

釜ヶ崎において日雇い労働者の運動が開始された70年代初頭、かれらの運動の中心にたって新たな闘争の領野を切り開いた活動家のひとりに、船本洲治がいる。船本の闘争の思想を特徴づけるのは、労働者の日常的な所作のうちに対抗の可能性を見出す観察眼と、かれらの共同の精神を言葉へと変換していく翻訳の力であろう。そのような船本がもっとも革命的な「現場闘争の戦術」として見出したのは、「休憩を徹底的にとり、サボタージュする」ことであった。いわく、「いくらアオラれても、返答もせず、腰をおちつけて動かないことによって、監督はイライラして、われわれを不気味に感じ、また挑発してくるだろう」（船本2018：155）。

このようにサボタージュに労働者の潜勢力を見出したのは、ひとり船本だけではない。70年代の激しい闘争が始動される端緒の局面において、その実践はすでに中心的な戦術となっていた。たとえば、71年5月8日に配られたビラ「大阪城」第284号は、「現場でサボるのは当然だ！」と大々的に記し、以下のように訴えている。

センターに来るとの仕事はケタ落ちばかりや。そやけど皆、生活のためにガマンして行っとる。それだけでも腹が立っとなのに契約違反までやっとな。全くおれたちをバカにしとる。違反なら働く必要なんかあれへんのか。仕事せんとゴロゴロしといたらええ。文句言うたら契約道理の仕事させると言ええ。そないせんと業者は増々付け込んで来よる。サラリーマンの給料は上がって行っとなのに、おれたちはケタ落ちのままや。業者がピンハネしてんのは目に見えとるやないか。違反の現場やったら皆んなで一緒にサボらなあかん。あいつら少々なことではやっつけられへん。皆んなが団結すればそれもできる。／皆んな現場でサボろう！

このようなサボタージュの戦術は、建設することへの積極的関与よりも、建設へと動員されることへ不服従の精神を示している。ここで強調しておきたいのは、労働者が内発的に培ったそのような慣習の抵抗が、世界的な闘争の地平と共鳴するものだったことである。たとえばその精神は、同時代のイタリアのオペライズモが練り上げた「労働の拒否」の思想と多くの共通項をもつ。暴力的な現場から命からがら逃げ出すことを労働者の言葉で「トンコ」というが、この言葉に表される精神性は、サンドロ・メッザードラ（2015）が論じる「逃走の権利」の思想と、驚くほど共鳴するのである。

b：労働市場とドヤ街

釜ヶ崎の闘争史にとってもっとも重要な画期は、72年5月にたたかわれた鈴木組闘争であった。鈴木組とは、ヤクザが経営する労働力仲介業者であり、釜ヶ崎の労働市場を統制する中核的な役割を担っていた。圧倒的な暴力をみせつけるこの業者に対し、労働者と活動家は、日々の労働力取引が行なわれる労働市場「あいりん総合センター」において反旗を翻した。そうして、そこに集う労働者の群れの力によって、かれらの目の前で、鈴木組の組長を土下座させ、謝罪させたのである。この画期的な勝利によって、72年の釜ヶ崎には、労働者の叛乱のエネルギーが爆発したのだった（原口2016）。

さて、ここで注目したいのは、鈴木組闘争の意味を検証する文章のなかで、この闘争を勝利しえた条件として、船本が次のように強調していることだ。

5月28日の闘いで教訓とすべきは、センターへ鈴木組が木刀で殴り込んだ時、鈴木組は単に一握りの鈴木組に反対する活動家集団を敵にしなければならず、釜ヶ崎労働者を敵に回したということである。逆に、もしも一握りの活動家集団がその前日「鈴木組をやっつけるために事務所へ襲撃に行こう」と呼びかけたとする。鈴木組が誰でも知っている悪質な業者であるにもかかわらず呼びかけに答えなかったら。われわれは次の結論を下さないわけにはゆかない。広範な人民大衆を巻き込む闘争は、基本的に敵の攻撃に対する防衛戦であり、まさに鈴木組がセンターに殴り込んで来たことによって広範なセンターの労働者は初めて鈴木組を粉砕することを“道理”として認識したのである。この防衛戦の基本的特徴は、味方の勢力の強い範囲に敵をおびきよせ粉砕することである。（船本2018：180-181）

すなわち鈴木組闘争において勝利の条件となったのは、労働力供給を実現するためのインフラが形成する地形の内に、労働者にとって有利な地点を見出し、それを最大限に活用しえたことにある。ここで重要なのは、この鈴木組闘争の舞台が、労働現場ではなく、労働市場だったことだ。そこは、労働力の売り買いが実現されるか否かが決定されるポイントである。もちろん多くの場合は労働者にとって不利に働くのだが、しかし、たとえばもし労働者が自身の労働力を売ることを拒否したならば、業者に致命的な打撃を与えるようなチョークポイントだったのである。

さらに重要なことに、労働力のプールとして構築されたドヤ街という空間は、労働現場や飯場や労働下宿とは異なり、労働ボスの支配や統制が直接には及ばないような、相対的に自律した生活領域を形成していた。労働市場であるセンターは、こうした自律的な生活領域の只中に位置したのである。かような地形的条件が「味方の勢力の強い範囲に敵をおびきよせ粉碎する」という戦術を可能にし、鈴木組闘争を勝利へと導いたのである。

すでに述べたように、釜ヶ崎とは、数多くの労働力の供給地を必要とする資本の要請に則って生産された空間である。あいりん総合センターにせよ、ドヤ街にせよ、そのことに変わりはない。だがその土地は、多くの労働者が生活し、日々の社交を繰り返すなかで、労働者の自律的空間へと転化された。そしてついに鈴木組闘争においては、労働力供給の要であるセンターをも労働者の自律的空間へと転化させたのだ。

c：暴動

投票箱、テレビのスクリーン、役人の小部屋、病院、それらをとりにかこむ儀式——これらは疎外の機構そのものといえることができるだろう。それらの機構は人間の想像力を打ち砕き、解体するための道具である。蜂起の契機とは、この官僚制装置が無力化されるそのようなときである。つねにその契機は、可能性の地平を大きく開放する効果をもつものである。（グレーバー 2017：141）

2節で述べたように、DANが催した自動車を破壊するパーティは、ラディカルな運動の生命を縛りつけるような、インフラの現実効果が無化する実践だった。蜂起の瞬間には、このような実践が凝縮されている。自動車を燃やすこと、ガラスをたたき割ること。テレビの報道が「一部が暴徒化」との定型フレーズで片づけるこうした実践は、上記の引用文のなかでグレーバーが語るように、官僚制を無力化し、可能性の地平を大きく開放する効果をもっている。すなわちそれは、インフラの権力を解体しようとする直接行動なのだ。

釜ヶ崎は、このグレーバーの議論を理解するうえで重要な土地である。この街では、1961年8月の第一次釜ヶ崎暴動以降、2008年6月の（いまのところ）最後の暴動にいたるまで、24回もの暴動が起こされてきた。すでに述べたように、釜ヶ崎に運動史が生まれるのは60年代末から70年代初頭のことだが、すでにそれ以前から、この街に住む労働者たちは蜂起を繰り返していたのである。暴動史や各時代における暴走の背景に立ち入って考察する余裕はないが、以下では、これらの暴動が含む「インフラへの対抗」の側面を抽出してみたい。

まず目を引かれるのは、61年8月の第一次暴動の引き金となった出来事のうちに、交通という

主題が見出されることだ。この8月1日、この街に住むひとりの日雇い労働者がタクシーに轢き殺された。この事件現場には警察官が駆けつけたものの、かれらはどこかへ消え去り、数十分のあいだ横たわる労働者を放置した。ようやくやってきた死体収容のパトカーを労働者の群衆が取り巻き、「早く病院へ運べ、まだ生きている」「俺達の命はどうなってもいいのか」と詰め寄った。その怒りはまたたくまに街中へと拡がり、5日間の暴動へと発展したのだった。

こうして釜ヶ崎の暴動史は、自動車が労働者の命を奪った事件が引き金となり、始まったのだ。そればかりでなく、60年代に多発した暴動には、交通への叛乱の側面が繰り返し現れる。労働者たちはたびたび道路を封鎖して自動車の通行を止め、何台かの車には火を放った。また、労働者の群衆は警察や機動隊に投石をもって対峙したわけだが、その石はどこから調達されたのか。『釜ヶ崎暴動略史』⁽⁴⁾の記録によれば、その主な調達元は、鉄道の敷石であった。また労働者たちは、ときに線路上に集結しては、鉄道の運行をも停止させた。こうして暴動のたびに、街の全域で交通を遮断させたのである。もちろん、このような状態のなかで求人活動を行なえるはずもなく、建設現場への労働力の供給ルートも遮断された。

派出所に火を放つ労働者の姿は、たとえば次のように描き出されている。「東隣の津郷薪炭店の倉庫の板をはがし「ワッショイ、ワッショイ」と声を上げ、燃えさかる派出所内に投げ込む。15、6人。焼け残っていた窓ワクまで燃え切る派出所」（寺島『釜ヶ崎暴動略史』）。その姿は、60年代山谷で起きた暴動を「お祭り」と表現した竹中労の言葉と重なり合う（竹中1969）。こうして労働者たちは、自分たちのエネルギーを建設へと送り込む「パイプライン」を遮断し、一時的にであれ祝祭的な自律空間を創出した。70年代に流れ入った活動家たちは、このような自律的な時空間に根ざすことで、対抗の空間を組織化したのである。

(3) インフラのコモン化——野宿生活

港湾労働や建設労働など、労働市場をつうじて労働者が従事する労働のほかに、もうひとつの隠された労働がある。不安定な雇用と恒常的な半失業を抱える日雇い労働者は、仕事を失った際には労働市場から締め出され、多くの労働者が野宿を生きるものだった。とりわけ構造的不況が労働市場を直撃する時期には、多数の労働者が失業し、野宿生活は一挙に広がる。90年代に入り「ホームレス問題」が社会問題として浮上したのも、このような状況を背景にしてのことである。

野宿生活の過酷さは、強調してもしすぎることはない。暑さや寒さや雨風に晒されるその生活は、労働者の身体を蝕み、毎年、厳寒期には何人もの労働者が路上で命を奪われてきた。さらに、野宿の労働者は、差別のまなざしに晒される存在でもある。そのような差別ゆえに、野宿者を襲撃する事件はいまなお跡を絶たず、労働者は絶えず生命の危機に晒される。また当事者も、とくに労働がアイデンティティの中核にある場合には、失業し野宿を生きる自身のありようを否定的に捉えることが多い。「ホームレス」という呼称が、そこにさらに追い打ちをかける。この言葉があまりにひろく浸透しているため、当事者もまた、自身を「ホームレス」と名指すことが多いのだ。欠如

(4) 『釜ヶ崎暴動略史』は、釜ヶ崎に生きたアナキスト詩人の寺島珠緒が書き残した手稿であり、現在は西成情報アーカイブに所蔵されている。執筆年は不詳だが、1970年代半ばに執筆されたものと推察される。

を意味する言葉を自分自身の呼び名として口にしなければならない状況のなか、野宿の生活に主体性を見出すことは、きわめて困難である。だが、このような過酷な現実を十分に認めたくえで、また、当事者の自己認識とはずれることを承知しつつ、インフラとのかかわりから捉え直すとき、そこに抵抗的な実践が潜在していることに気づくはずだ。

まず強調しておくべきことは、野宿を生きる人びとの多くが、労働に従事していることだ。すでに述べたように、それは、アルミ缶集めや段ボール集めなどの、リサイクル業である。以下は、神戸 YMCA 夜回り準備会作成の報告書に記された、リサイクル業の実情である。

粗ごみを集めている（野宿している）人にとって、自動車で粗ごみを集める人は脅威になっています。野宿している人の運搬手段は、よくて荷物を大きくした自転車だから、自動車で集められると、速さでも、運ぶ量でも太刀打ちできない。／粗ごみの目利きの出来ない人は、以前から、アルミ缶やフライパンなどを集めて、回収業者に買ってもらっていましたが、粗ごみで暮らしてきた人もアルミ缶を集めるようになり、競争が激しくなってきました。／2008年は夏に向かって、アルミ缶の価格が大きく上昇した年です。1キロ60円くらいまで下がってきたアルミが、中国の経済成長のゆえか、オリンピックに関連があるのか、急上昇し、8月にはキロ180円にまでなった。しかし、9月から急落し、60円、50円、40円と値下がりしました。しかも、量も集まらないので、収入が三分の一、四分の一になり、ちゃんと飯が食えない人が多くなっています。（神戸夜回り準備会（仮）2009：5）

日本国内で収集されたアルミ缶は、コンテナに詰められ、国外とりわけ中国での生産へと供給される。つまりこれらの路上の労働は、残余的なものであるどころか、グローバル経済の回路に分かちがたく結びつけられている。だからこそ、2008年の世界金融恐慌は、アルミ缶の買い取り価格の急落を引き起こし、野宿の労働者をさらなる窮状へと追いやったのである。こうした価格変動、労働者間の競争、自治体による持ち去り行為の犯罪化などの要因により、リサイクル労働の過酷さや不安定性は、近年ますます増大されようとしている。

だが、野宿の生活に関連する労働は、こうした現金収入だけではない。かれらは、寝泊まりできる場所をみつけだし、みずからの手で家をつくり、生活をつくっていかなければならない。そうしたことのすべてが、労働なのである。そして、このような生活＝労働の局面のなかに、インフラをめぐるもっとも重要な論点が潜んでいる。

野宿で生活する者は、どこかに自身の寝場所を見出さなくてはならないが、この地表上のあらゆる土地は、私有財産か公有財産かのいずれかである。そして、不動産についてグレーバーが論じたように、土地の所有には、国家の主権の力が刻み込まれている。したがって、どのような土地であろうと、そこに生活を築くことは、不動産に宿る国家の力への直接介入とならざるを得ない。だからこそ野宿を生きる労働者は、物理的な立ち退き、嫌がらせや襲撃、排除オブジェなど、様々な形態の暴力に直接に晒される。インフラには暴力が孕まれていることをもっともよく知るのは、かれら野宿者だろう。

だが他方で、かれらは「民衆のインフラ」と呼ぶべきものをつくりだす主体でもある。公園や高架下や河川敷に設えられたテントや小屋は、まさに、生存の必要に則って生産されたインフラには

かならない。このようなインフラ建築は、生存の必要にもとづいたその造形ゆえに、先鋭的なプランナーやアーティストを惹きつけることもある。たとえば、坂口恭平は野宿生活を「都市型狩猟採集生活」と名づけ、かれらがつくるテント小屋の構成がいかに創意工夫に満ちたものかを、書き記したのだった（坂口2010）。資本主義のインフラ建設の労働からはじき出されたかれら野宿の労働者たちは、こうして、民衆のインフラをつくりだす主体となる。あるいは、ケアリング労働という言葉にもう一度立ち返るなら、かれらは失業することによって、ラディカルなケアリング労働者になる、と言えるかもしれない。こうした民衆的な実践を、ラガヴァンとシュリヴァスタヴァにならって、「インフラのコモン化」と呼ぶことができるだろう（Ragavan and Srivastava 2020）。重要なことに、コモン化の実践例の多くは、災害によって機能停止に陥った先進国都市や、グローバルサウスの都市スラムから報告されている。この意味で、野宿というもっとも苛酷な生活のうちに創造的なものを見出すのは、決して不自然なことではないのだ。

おわりに

以上で概観したように、釜ヶ崎の労働者たちが携わってきた、港湾労働、建設労働、そして野宿の生活＝労働は、いずれの労働も、インフラとのかかわりや介入の契機をもつ。しかし、そのかかわりや介入のありようは、労働のフィールドによって異なるものであった。最後に、それぞれの事例から導き出されるインフラの命題を、要約してみよう。

港湾労働においては、入港する船舶と岸壁とのあいだに生み出される空隙がチョークポイントとなり、また貨物は労働者の身体を動員してのみ運搬しえたことを条件として、労働者は海運・港運資本に対抗する実践を繰り広げた。これに対し資本は、船舶と岸壁の空隙を塞ぐことで労働者への圧倒的有利を確立したわけだが、そのような資本の有利性を実現させた契機とは、コンテナ・ターミナルというまったく新しいインフラの構築である。この経験が教えるのは、コンテナ・ターミナルとは本質的に労働者に敵対するインフラである、ということだろう。

だが、労働者の対抗を可能にするようなインフラもある。建設労働において労働者たちはサボタージュの実践を繰り広げ、建設資本の内側に取り込まれていながら、労働の拒否と呼ぶべき抵抗を繰り広げていた。また、労働力の売り買いが行なわれる労働市場での闘争に勝利し、いわばチョークポイントを制圧したのであった。建設資本の支配が直接には及ばぬドヤ街というインフラは、船本の分析が示すように、労働者の対抗を実現しうる条件であったと捉えることができる。ただしそのドヤ街とて、もとを辿れば、大量の労働力をプールし、速やかな労働力供給を実現すべく、資本の要請に則って形成されたことに変わりはない。決定的なことは、そのうえに日々の労働者の生活が織り込まれるなかで、ドヤ街というインフラは労働者の根拠地へと転化されえたといい、その事実である。

最後に、そしてもっとも重要なことに、私たちは民衆的インフラの構築についても語りうる。野宿の労働は、きわめて苛酷であり、またかれらはインフラの暴力に恒常的に晒されるような状態を生きざるを得ない。だが、かれらは、インフラから締め出されているがゆえに、みずからの手でインフラをつくる。かれらのつくるテントや小屋は、生存の必要に則り生み出されるのであり、そこ

には「インフラのコモン化」の可能性を論じるための手がかりが潜んでいる。こうして私たちは、資本主義の矛盾がもっとも厳しい場所にこそ、民衆的インフラを創造する必然性と潜在力を見出すことができる。

以上は、寄せ場という限られた場所を再考する際に導き出される視点であり、また、いずれの命題もいまのところ試論にとどまる。様々な場所で、よりいっそう複眼的な検証を行なうならば、インフラをめぐる命題を、もっと豊かに膨らませていくことができるはずだ。あまりに早すぎる死によってグレーバーのインフラ論は途絶えてしまったが、おそらくその先には、インフラを解放し、あるいはインフラから解放されるための、多様な戦術を構想する可能性が待ち受けているのではないだろうか。そうした戦術を発見していくことは、対抗力の源泉としての想像力を奪い返すために、必要不可欠であるように思えてならないのだ。

（はらぐち・たけし 神戸大学大学院人文学研究科准教授）

【参考文献】

- グレーバー・D（2006）『アナーキスト人類学のための断章』高祖岩三郎訳、以文社
グレーバー・D（2009）『資本主義後の世界のために——新しいアナーキズムの視座』高祖岩三郎訳、以文社
グレーバー・D（2017）『官僚制のユートピア——テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』酒井隆史訳、以文社
グレーバー・D（2020）『ブルシット・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹訳、岩波書店
ハーヴェイ・D（1989-1990）『空間編成の経済理論（上・下）』水岡不二雄監訳、大明堂
ハーヴェイ・D（2013）『反乱する都市——資本のアーバンイゼーションと都市の再創造』森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井大輔訳、作品社
メッザードラ・S（2015）『逃走の権利——移民、シティズンシップ、グローバル化』人文書院
Ragavan, S., and Srivastava, S. (2020) “Commoning Infrastructures,” *Society & Space*, November 30, 2020. (<https://www.societyandspace.org/articles/commoning-infrastructures>)

- 青木秀男（1989）『寄せ場労働者の生と死』明石書店
神戸夜回り準備会（仮）（2009）『神戸 YMCA 夜回り準備会活動報告書 Vol.5』
坂口恭平（2010）『ゼロから始める都市型狩猟生活』太田出版
竹中労（1969）『山谷——都市反乱の原点』全国自治研修協会
原口剛（2016）『叫びの都市——寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』洛北出版
船本洲治（2018）『[新版] 黙って野たれ死ぬな』共和国
労務者渡世編集委員会（1975）『労務者渡世』第11号
渡辺拓也（2017）『飯場へ——暮しと仕事を記録する』洛北出版